

M、ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

大塚久雄訳 岩波書店 1989年

(p 178～p 216)

第2章 禁欲的プロテスタンティズムの天職倫理

1 世俗的内禁欲の宗教的基盤

牧会上の相互に関連しあう二つの種類の勧告

- ① 誰もが、自分は選ばれているのだとあくまで考えて、すべての疑惑を悪魔の誘惑として斥ける、そうしたことを無条件に義務づける。
- ② そうした自己確信を獲得するための、最も優れた方法として、絶えまない職業労働を厳しく教えこむ。

世俗的職業労働こそが、このことをなしうると考えられた根拠は、改革派教会のなかで培われた宗教的感覚の根深い特質にある。

・ルッター派の信仰が最高の宗教的体験として追求したもの

↓

神自身との「神秘的合一」

↓

「日毎の悔い改め」を注意深く育む

- ・ 改革派の独自の宗教意識

↓

「有限は無限を包容しえず」

↓

神が彼らのうちに働き、それが彼らの意識にのぼる。つまり、彼らの行為が、神の恩恵の働きによる信仰から生まれ、さらに、その行為の正しさによって、信仰がまた神の働きであることが証しされる。

宗教的達人が自分の救われていることを確信しうるかたち

- ① 自分を神の力の 容器 と感じる

↓

神秘的な感情の培養

↓

ルッター

- ② 自分を神の力の 道具 と感じる

↓

禁欲的な行為

↓

カルヴィニズム

- ③ 改革派の信徒

「信仰のみ」によって救われようと欲した

信仰は「有効な信仰」でなければならない

救いへの召命は「有効な召命」でなければならない

どのような成果によって真の信仰を確実に識別できるのか

↓

神の栄光を増すために役立つようなキリスト者の生きざま

何が神の栄光を増すことになるか

- ・ 聖書で直接に啓示されている
- ・ 神の造り給うた世界の合目的な秩序から間接に知りうる、そうした神の聖意から推し量ることができる

選ばれた者だけが、真に有効な信仰をもち、再生とそこから生まれてくる全生活の聖化を踏まえて、神の栄光を、外見だけでない真実の善行によって増し加えることができる

自分の行為が — 少なくともその根本的性格と持続的意図からみて — 神の栄光を増さんために自分のうちに生きている、そうした力にもとづいており、したがって神の聖意にかなうとともに、何よりも神の聖業によるものだ意識する、これによって、この宗教意識が目ざす最高の善、つまり恩恵の確信にまで到達しうる

善行が時にはいきなり「救いのために必要」だとされたり、あるいは「救いの取得」が善行につなげられたりする

↓

神はみずから助ける者を助ける

カルヴァン派の信徒は、自分で自分の救いを「造り出す」

↓

どんな時にも選ばれているか、捨てられているか、という二者択一のまえに立つ組織的な自己審査によって造り出す

↓

ルッター派がくりかえし「行為主義」だと非難

道徳的行為を宗教的に尊重するにしても、カルヴィニズムがその信徒たちのあいだに作りだしたもののほど強烈な形は、おそらく他にはなかった

中世では、通常のカトリック平信徒は、倫理のうえでは、いわば「その日暮らし」をしていた

カトリックの倫理は「心情」倫理だった

しかし、個々の行為の具体的な「意図」がその行為の価値を決定した

理想として人間に原則のある生き方を要求したことも確かだが、懺悔の秘蹟という聖礼典によって、この要求もきわめて弱いものになってしまった

世界の「呪術からの解放」すなわち救いの手段としての呪術を排除すること

↓

カトリック信徒は、教会の聖礼典「秘蹟」のもたらす恩恵によって、自分にはどうにもならないものを補うことができた

カルヴィニズムの神がその信徒に求めたものは、個々の「善き業」ではなくて、組織にまで高められた行為主義だった

↓

現世の生活は、地上で神の栄光を増し加えるという観点によってもっぱら支配され、徹底的に合理化されることになった

しかも「すべてを神の栄光の増さんがために」との立場を、彼らほど真剣に考えたものはかつてなかった

ピューリタニズムの禁欲の働き



意識的な、覚醒しかつ明敏な生活をなしうることであり、無軌道な本能的享樂を絶滅することが当面の課題であって、その信奉者たちの生活態度を秩序あるものにする

カルヴィニズムがルッター派とことなり「戦闘の教会」としてプロテスタンティズムを存続させえた巨大な力は、このような全人格の組織的な把握という事実とその根源をもっていた

中世の禁欲とカルヴィニズムの禁欲のあいだの対立



カルヴィニズムにおいては「福音的勸告」がなくなり、その結果、禁欲が純粹に世俗内的なものに造りかえられた

・再生者たるキリスト者



教会の管理やその他特殊の地位を保留し、牧師の地位を認める

・再生者でなく聖礼典にあずかりうるまでに成熟していないキリスト者

禁欲的生活態度には、たえず規準としうるような確固たる規範が必要



「聖書至上主義」

理想を指し示す規範

カルヴィニズムの固有な、つまり禁欲的な根本的性格それ自身が、旧約の敬虔感情のうちから自己と同質の諸要素だけを選びだして、それを自己に同化させたというべきだろう

生活全体の徹底したキリスト教化は、カルヴィニズムが、ルッター派とはちがって、倫理的な生活態度に押しつけたその方法意識の帰結だったその方法意識こそが人々の生活に決定的な影響をもたらした

- ・この際立った特質によって、はじめてあつた影響が生じた
- ・他種の信仰も、もしこの決定的な点、つまり救いの確証という思想をとおして同様な倫理的刺激をもつたとすれば、同一の方向に向かって作用せざるをえなかった